『週刊ポスト』2020.4.27(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第118回 「アジアの歌姫」テレサ・テンの『何日君再來(いつの日君帰る)』

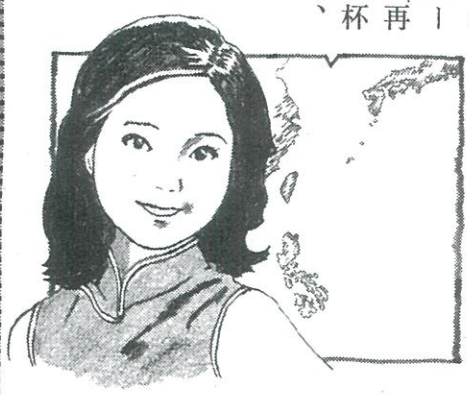
私が初めて香港を訪れたのは昭和58年のことですが、当時の香港スター、許冠傑（サミュエル・ホイ、「Mr. Boo!」シリーズの二枚目のほう）の海賊版カセットテープが夜店の屋台で正規の4分の1くらいの価格（当時の日本円で200円ほど）で売られていました。

海賊版といっても正規レコードのコピーテープではなく、ジャケットはイラストで描かれた偽物、演奏も歌手もよく聞いてみるとオリジナルとは異なるまがい物という、日本人からすると常識外の珍品で、私は正規のものと両方購入して、帰国後に聞き比べるのをひそかな楽しみにしていました。

文化圏としても香港に近い台湾に生まれ、天才少女として14歳でデビュー、香港、シンガポール、マレーシアなどでも人気を獲得し、「アジアの歌姫」として知られていたテレサ・テンが、日本でデビューしたのは昭和49年3月、21歳のときでした。年齢を19歳と偽ってアイドル路線を狙ったデビュー曲は思ったほどヒットせず、シングル第2弾『空港』で早くも方針転換、森進一や藤圭子の作品で知られる演歌系の猪俣公章に作曲を依頼、西田佐知子風な大人の女性歌手へと変身したのが成功し、知名度を全国区へと広げます。

あいにく昭和54年2月にパスポート偽造により国外退去、1年半ほど米国に滞在後、日本で再デビューするまでの間、テレサは台北、香港、シンガポールなどで公演、アジア圏での人気を復活させます。そうした時期に中国では改革・開放路線が進み、台湾・香港からの文化がどっと流入、テレサの歌う『何日君再來（ホーリージュンザイライ）』が中国各地で大ヒットするという現象が起こります。

『何日君再來』は昭和13年に上海で製作された映画『三星伴月』の挿入歌としてヒット、その後も多くの歌手に歌われ、ゆったりとしたチャイニーズ・メロディーと「再会を願って別れの杯を交わす」歌詞は、中国を代表する国民歌謡となりました。日本では戦前に李香蘭と渡辺はま子が歌っています（渡辺盤の邦題は『いつの日君帰る』）。



テレサの歌に限りませんが、まだ富裕層の少なかった中国で、全国的に大衆歌謡が伝播した背景にはカセットテープの存在がありました。毀損の心配が少なく手軽、そして何といってもオリジナルのものから次々とダビングできたことが普及の最大理由でしょう。

正規販売されたテレサのレコードやテープも売れたのでしょうが、おそらく大半の人はダビングされたテープを擦り切れるくらいに聴きまくったことでしょう。中国社会の間では「小鄧（テレサ＝鄧麗君）の人気は老鄧（鄧小平）を圧倒する」とまでささやかれるほどだったようで、その人気の広がりを危惧した中国当局はのちにテレサの歌を禁止しますが、当局の調べでは当時、全土で2億本のコピーテープが出回っていたそうです。

テレサ急逝からこの5月8日で25年が経ちます。中国の人たちは、日本では見なくなったカセットテープを聴きながら、鄧麗君の再来を待っているのかもしれません。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中